

アジアにおける青少年へのスポーツカルチャーの浸透度に関する国際比較研究

野川春夫*

John Wang Cheee Keng** Kim Chong***
Philip Cheng**** Mohd Salleh Bin Aman*****

抄録

本研究の目的は、アジア 4 カ国における健康関連専攻学生のスポーツ文化観とスポーツ・運動活動の実態を明らかにするとともに、健康関連専攻学生へのスポーツカルチャーの浸透度を明らかにすることであった。調査対象国は、日本、台湾、韓国、マレーシアの各首都にキャンパスのある 4 大学の学生 1,500 名を対象とした直接配布・直接回収法による質問紙調査を実施した（有効回答数：1,355 部）。Wang ら（2011）が開発した *Sporting culture inventory* の質問紙をベースにし、4 か国の共同研究者と協議の上、英語版と各国の自国言語版の調査票を作成した。質問票は、スポーツ習慣、スポーツ文化観、運動習慣、人生の抱負、属性の 5 部門で構成されている。対象学生は、医学専攻（N=288）、看護学専攻（N=474）、体育・スポーツ学専攻（N=407）およびその他（N=186）とし、分析は国別と専攻分野別でクロス集計と一元配置分散分析をおこなった。スポーツカルチャーが最も浸透しているのは、当然ながら体育・スポーツ専攻学生であり、次いで「その他の専攻」学生であった。「その他の専攻」の学生には、経営学、経済学、心理学、工学等が含まれており、医学専攻と看護学専攻よりもスポーツカルチャーの全項目において高いスコアを示した。国別の比較では、スポーツの利便性／機会に対してマレーシアと台湾の学生が高いスコアを示し、スポーツ結果に対する誇り（プライド）は日本を除く 3 か国の学生が高く、スポーツ情報に対する知識は 4 か国とも低くあまり関心を示していない。スポーツの価値（精神的、社会的、身体的、心理的）については、心理的な項目以外は、4 カ国の学生ともスコアが高かった。これらの結果から、専攻・国に関係なく、大学生にスポーツカルチャーは浸透している。特に、スポーツの価値に関する文化観は浸透していると示唆できよう。但し、看護専攻の学生のスポーツカルチャーと運動習慣は、他の専攻と比較して有意に低い、ネガティブではない。

キーワード：スポーツカルチャー、健康関連専攻、大学生、国際比較

* 順天堂大学 〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1

** 南洋工科大学 シンガポール

*** 漢陽大学 韓国ソウル市

**** 台湾師範大学 台湾台北市

***** マラヤ大学 マレーシアクアラルンプール市

An International Comparative Study on Sporting Culture of among Asian Countries

—Penetration to Health Related Major University Students—

Haruo Nogawa *

John Wang Cheee Keng** Kim Chong***

Philip Cheng**** Mohd Salleh Bin Aman*****

Abstract

Sport plays a significant role in the culture of Asian countries. The purpose of the study was to examine and compare the degree of penetration of sporting culture to university students among Asian countries. A total of 1,355 university students from four countries participated in this project. The students took part in this study were mainly health-related majors such as medical students, nursing students and physical education students, in addition to non health-related major students. Four universities are located in their capital city such as Kuala Lumpur, Seoul, Taipei and Tokyo. A self-administered questionnaire consisted of the Sport Culture Measure, Exercise Regulation questionnaire (BREQ-2), and Life Aspirations was used in this study. The questionnaire was delivered in English and translated into native languages accordingly. One-way ANOVA was conducted to compare the degree of penetration of sporting culture among the four countries.

On the basis of the nationalities and academic majors, significant difference was found in all of the sport culture measure. Apart from physical education students, non health-related students showed higher penetration of sporting culture while nursing students revealed the least penetration of sporting culture. Value of sport, a part of the sport culture measure, was highly supported by all subjects. The results indicated showed that sporting culture predicted sport participation among the university students of the four countries. Therefore, the sporting culture appeared to be penetrated to university students regardless of academic majors in these four countries.

Key Words : sporting culture, health-related majors, university students, international comparison

* Juntendo University 1-1 Hiraga Gakuendai, Inzai City, Chiba

** Nanyang Technological University Singapore

*** Hang Yang University Seoul, Republic of Korea

**** Taiwan Normal University Taipei, Republic of China

***** University of Malaya Kuala Lumpur, Malaysia

1. はじめに

Jリーグが開幕した1993年に「サッカーは文化である」と宣言されて以来、スポーツ文化という概念がマスコミを通じて喧伝されはじめた。3年後の1996年には「Jリーグ百年構想」にサッカーを核とした地域におけるスポーツ文化の確立を目指すことが盛り込まれ、スポーツを文化として捉えようとする機運が高まった。この潮流に併せて、スポーツ振興基本計画(2000)においてもスポーツ文化の定着・浸透という話題が注目され、さらに2012年のスポーツ基本法においては「スポーツ文化」という文言が条文に盛り込まれた。

スポーツが固有の意味と価値体系を内包する文化的営みであることは、洋の東西にかかわらず多くの研究者や有識者によって指摘されている。体育哲学や体育原理、スポーツ史、文化人類学、比較文化論、スポーツ社会学などの分野において、様々な研究者が「スポーツと文化」や「スポーツ文化」を探求している。しかしながら、スポーツ文化の定義は依然曖昧であり、研究者や有識者によって捉えどころは全く異なることが散見されている。

スポーツ文化観

本研究では、スポーツ観およびスポーツへのスポーツ意識をスポーツ文化観(Sporting culture)と操作定義して本研究を進めた。Sporting cultureは、アジアの若者のスポーツ観およびスポーツ意識を明らかにするためにシンガポール南陽工科大学のJohn Wang et al. (2012)が開発した心理的尺度である。

シンガポールは、国民の健康づくりのツールとして「生涯スポーツ」の振興政策を積極的に進め、東南アジアの「生涯スポーツ」の先進国であった。しかしながら、高温多湿の熱帯雨林気候という自然条件に加え、受験戦争とコンピュータゲームなどの内遊びが蔓延し、若年層の体力低下・運動不足は深刻な状況に至ったことから、健康づくりの「生涯スポーツ」から国の威信をかける「競技スポーツ」に転換する方針を打ち出した。そして、2010年の第1回I O Cユースオリンピックの開催誘致に成功し、その前年の2009年はアジアユースゲームズをリハーサル替わりに開催するなど、アジア大会のみならずオリンピックにおいても「国の威信」を見せようとしている。

先行研究の紹介

社会文化的な影響に加え、運動・スポーツへの参加を規定する要因として内発的および外発的なモチベーションが注目されている。Wang et al. (2002)、Deci & Ryan (1985)およびRyan & Deci (2000, 2001)は、スポーツ参加を規定する要因としてモチベーションに説明力がある自己決定理論(self-determination theory perspective: SDT)を主張している。SDTモデルの前提は、

健康になるために人々は内発的な動機づけをもち、能動的な身体的および心理的発達を求めて人々は行動するとされている。SDTの視座によると自我および個人的な開発には3つの心理的要素(自主性、適格性、関係性)が重要とされている。SDTモデルは、人は誰でも自分のニーズを満たすために動機づけられており、ニーズを満たす欲求が活動参加を促す源泉につながるという考え方である。

スポーツや身体活動に関する心理学的な先行研究では、内発的なモチベーションがスポーツ活動への行動的・情動的・認知的な成果をもたらすことが報告されている(Deci & Ryan, 2002)。内発的なモチベーションがもたらす成果として、肯定的な影響(Ntoumanis, 2005; Standage, Duda, & Ntoumanis, 2005)、努力(Ntoumanis, 2001)、関心(Goudas, Biddle, & Fox, 1994)、身体活動への参加意思(Standage et al., 2003)、そして身体活動とスポーツ参加(Biddle, Treasure, & Wang, 2008)が挙げられている。反対に、外発的なモチベーションがもたらす結果としては、退屈感やバーンアウト(Li, Wang, Pyun, & Kee, 2013)や活発な身体活動へのやる気に否定的であったり(Lim & Wang, 2009; Standage et al., 2003; Wang & Biddle, 2007)、スポーツ参加にもネガティブな関係が報告されている(Wang, Koh, Biddle, Liu, & Chye, 2011; Yli-Piipari, Wang, Jaakkola, & Liukkonen, 2012)。

SDTに関連する最近の研究では、人々は社会的な行動を通して自分の目標や人生の抱負を達成しようとする。Kasser and Ryan (1996)の報告では、内発的な目標または人生の抱負が個人的な成長や意義ある交友および地域貢献に結びつく。内発的な目標は、先述の3つのニーズを満たすことから肯定的な成果(幸福感、ストレスの軽減、自信をつける)と関連があるが、反対に外発的な目標は富と知名度等の物質的な人生目標を含んでいることから3つの基本的ニーズに帰結する満足感をもたらすことはない(Vansteenkiste, Simons, Lens, Sheldon, & Deci, 2004)。Wangらの調査(2011)によると外的環境がスポーツ選手の人生の抱負に影響を及ぼすことを報告しているが、スポーツ文化観との関連は不明である。

2. 目的

21世紀はアジアの時代と謳われ、エネルギー資源や経済活動、宗教活動および人口動態などに欧米から注目が集まっている。東南アジアと東アジア圏においても人口の増加と少子高齢化の波は次第に押し寄せていることから、健康関連の職業に従事する若者のスポーツ観やライフスタイルは運動・スポーツを通じた国家の健康づくりに直接的・間接的に影響を及ぼすと考えられる。

そこで本研究の目的は、アジア4カ国における健康

関連専攻学生のスポーツ文化観とスポーツ・運動活動の実態を明らかにするとともに、健康関連専攻学生へのスポーツカルチャーの浸透度を明らかにすることである。

3. 研究方法と手順

対象者と調査手順：

調査対象国は、日本、台湾、韓国、マレーシアである。シンガポールに関しては、Wang らが既に調査済みであったことから実施していない。また研究計画では、インドネシア、タイ、中国の大学生を予定していたが、国内の政情不安と外交上の政治問題が絡み、調査協力が得られなかったため、前述の4カ国となった。

各国1大学の学生を対象とした点は、対象者の偏りが指摘される可能性がある。調査研究の限界とも言えるが、研究協力者の大学において倫理委員会の承認を得たのちに、英文および自国語に翻訳した質問票を学生に直接配布・直接回収法により調査を実施した。性別と専攻分野の質問項目に加え、両親の職業、学歴、所得等の質問項目に対して未回答の学生はデータ分析から除いたため、本調査の有効回答数は、1,333であった。

英文および自国語に翻訳した質問票を学生に直接配布・直接回収法により調査を実施した。性別と専攻分野の質問項目に加え、両親の職業、学歴、所得等の質問項目に対して未回答の学生はデータ分析から除いたため、本調査の有効回答数は、1,333であった。

質問紙 (Sporting culture inventory 尺度)：

本研究で用いた質問票は、Wang らが開発した Sporting culture 研究 (2011) の質問紙をベースにして4カ国の共同研究者と各質問項目を協議して英語版と各国の自国言語版を作成した。質問票はスポーツ習慣、スポーツ文化観、運動習慣、人生の抱負、属性の5部門で構成されている。

スポーツ文化観 (Sporting culture inventory 尺度) は、最初は5要因19項目から構成されていた。5要因は、利便性/機会 (3項目)、知識/意識 (4項目)、スポーツ結果に対する誇り (3項目)、スポーツの価値 (4項目)、スポーツアイデンティティ (5項目) であった。各項目への回答は、5段階のリッカート尺度が使われており間隔尺度となると仮定されていた。しかしながら、スポーツアイデンティティの項目のみ名義尺度を使っていたことから、共同研究者の Wang 教授と協議のうえ、本調査ではこの要因を除いた4要因とした。

運動習慣 (Exercise regulation : BREQ-2) は、Mullan, Markland & Ingledew (1997)が開発した動機づけ理論を

基盤とした運動習慣尺度である。14項目で構成されており、5段階のリッカート尺度で回答する形式となっている。

人生の抱負 (Life aspiration inventory) は、Kasser & Ryan (1996)によって開発された学生の人生目標を測定する尺度である。外因性抱負 (extrinsic aspiration) と内因性抱負 (intrinsic aspiration) が19項目に含まれ、各項目は5段階のリッカート尺度で回答する形式となっている。

スポーツ参加 (Sports participation) は、参加頻度、参加期間、激しい運動への参加頻度、中程度の運動への参加頻度の4項目で構成され、回答選択肢は6段階尺度となっている。これら4項目の平均値をスポーツ参加指標としている。

4. 結果及び考察

本稿では紙面の関係上、国別のデータと専攻別データを中心に主な結果を紹介する。本調査に協力した体育・スポーツ専攻の学生400名は、台湾とマレーシアに偏っているため本稿での分析対象からは除いた。したがって本稿では993名の学生を対象としてクロス集計をおこない、専攻別および国別に一元配置分散分析を実施した。

表1と表2は、サンプルの属性と運動・スポーツ参加状況を国別および専攻別で示している。

医学専攻の学生は、日本と台湾が全体の約8割を占めている。体育・スポーツ学専攻の3/4は台湾の学生である。看護学の学生の9割強が日本人と台湾人である。「その他の専攻」には、マレーシアの学生が8割強を占めている。

学年では、日本人の9割が1年生であり、台湾人学生の9割以上が3年生以上である。マレーシアの学生の6割強が3年生以上であり、学年の均質化はできていない。

体育・スポーツ専攻学生を除き、過去6か月間にスポーツ活動への参加の有無を質問したところ、日本人学生の74%、台湾人学生の86%、マレーシア人学生の65%、韓国学生の64%が参加していると回答し、週3回以上のスポーツ参加頻度と回答した学生は、日本27.4%、台湾34.5%、マレーシア29.2%、韓国25%であった。看護学専攻の女子学生が日本人サンプルの2/3を占めることから参加頻度が低くなったが、医学専攻学生は1年生のためか長い受験勉強の後の1年間は積極的にスポーツ活動に参加していることが窺える。

スポーツ参加頻度は高くないが、1回当たりの平均スポーツ活動時間は日本人学生の約半数 (48.5%) が2時間以上実施している。42%の台湾人学生は30分~60分の活動である。マレーシアの

	日本 (N=409)		台湾 (N=273)		マレーシア (N=191)		韓国 (N=75)	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
【専攻】								
医学	71	36	104	18	11	22	14	12
看護学	32	270	15	123	0	1	10	23
その他	0	0	3	10	59	98	11	5
【学年】								
1年生	98	247	3	4	26	23	10	31
2年生	4	59	9	3	11	12	1	2
3-4年生	1	0	110	144	32	86	20	6
【過去のスポーツ活動】								
有り	86	217	115	120	58	67	28	20
無し	17	87	7	31	12	54	7	20
【スポーツ参加頻度】								
時々～2週間に1回	7	37	16	32	16	24	8	6
週1回	8	89	18	24	15	15	9	6
週2回	27	51	33	25	6	13	3	3
週3回	21	24	27	21	7	7	5	3
週4回以上	23	15	20	13	14	8	2	2
【平均スポーツ活動時間】								
30分未満	2	9	6	16	2	13	0	0
30分～1時間	3	24	43	56	21	25	6	16
1時間～2時間	23	97	30	30	24	22	15	3
2時間以上	58	89	36	12	11	7	8	1
【高強度のスポーツ参加】								
30分未満	21	135	33	92	26	78	10	31
30分～1時間	14	44	44	44	26	29	13	8
1時間～2時間	19	52	17	10	4	10	5	1
2時間以上	47	57	28	3	12	4	7	0
【中強度のスポーツ参加】								
30分未満	26	133	34	77	20	65	8	24
30分～1時間	14	66	33	50	28	36	14	5
1時間～2時間	16	46	31	15	11	14	7	7
2時間以上	45	49	24	9	9	5	6	4
【ウォーキング参加】								
30分未満	19	67	21	44	8	20	4	8
30分～1時間	15	68	42	67	17	37	11	9
1時間～2時間	21	68	25	18	19	21	9	5
2時間以上	48	94	34	22	23	39	11	18

	医学 (N=288)		体育・スポーツ (N=407)		看護学 (N=474)		その他 (N=186)	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
【居住国】								
日本	71	36	0	1	32	270	0	0
台湾	104	18	161	137	15	123	3	10
マレーシア	11	22	29	34	0	1	59	98
韓国	14	12	33	12	10	23	11	5
【学年】								
1年生	78	49	39	40	36	234	23	22
2年生	8	4	35	29	4	60	13	12
3-4年生	113	34	144	114	15	123	35	79
【過去のスポーツ活動】								
有り	181	64	208	172	44	296	62	64
無し	19	23	15	12	13	120	11	49
【スポーツ参加頻度】								
時々～2週間に1回	27	7	15	15	5	69	15	23
週1回	28	20	21	17	7	101	15	13
週2回	46	17	28	19	17	61	6	14
週3回	40	13	35	39	11	33	9	9
週4回以上	39	7	99	68	3	26	17	5
【平均スポーツ活動時間】								
30分未満	7	7	0	5	1	21	2	10
30分～1時間	46	16	22	35	10	75	17	30
1時間～2時間	50	21	81	63	15	113	27	18
2時間以上	79	19	96	59	17	85	17	5
【高強度のスポーツ参加】								
30分未満	53	35	29	47	29	47	23	72
30分～1時間	50	25	56	60	56	60	27	27
1時間～2時間	35	12	71	35	71	35	5	9
2時間以上	61	14	65	39	17	46	16	4
【中強度のスポーツ参加】								
30分未満	53	34	30	39	19	202	16	63
30分～1時間	45	19	80	73	14	104	30	34
1時間～2時間	46	18	67	42	6	52	13	12
2時間以上	56	14	45	29	16	49	12	4
【ウォーキング参加】								
30分未満	28	15	63	48	16	101	8	23
30分～1時間	51	20	85	66	15	121	19	40
1時間～2時間	42	21	41	40	11	74	21	17
2時間以上	79	30	34	29	15	114	25	33

学生は、30分～60分(37.4%)と1時間～2時間(37.4%)と回答しており、韓国の学生は半数弱が30分未満と回答しており、不活発な状態が伺われる。

高強度のスポーツ参加とは、10分間程度で呼吸がかなり激しくなるスポーツ(バスケットボールやエアロビックダンス等)を指し、過去7日間にどの程度の時間費やしたについての設問である。約半数弱(45.6%)の学生が30分未満と回答している。30分～1時間の回答を含めると7割強が1週間で1時間ほどの呼吸が激しくなるスポーツを実施している。10分ほどで呼吸がやや早くなる中程度のスポーツ活動の参加時間も殆ど同じ回答傾向である。

参加頻度、平均活動時間、高強度・中強度のスポーツ活動の参加時間等、すべてにおいて男性が女性よりも活発なスポーツ活動を実施していた。

表2に示されるように、看護学専攻の女子学生はスポーツ参加の機会にあまり恵まれていないが、参加頻度、平均活動時間、高強度・中強度のスポーツ活動の参加時間等に関して数値は低いが、決して消極

的な取り組みには見えない。医学専攻の学生は、むしろスポーツ活動に積極的に取り組んでおり、スポーツや身体活動へのポジティブな姿勢が感じられる。

表3は、学生のスポーツ文化観を国別に比較したものである。スポーツの利便性/機会に対して高い評価をしているのがマレーシアと台湾の学生である。スポーツ結果に対する誇り(プライド)については、日本を除く3か国の学生の高い得点を出している。

スポーツ情報に対する知識は4か国とも低く、メディアのスポーツ情報に対してあまり関心を示していない。その他の専攻学生がスポーツ専攻学生よりも高く評価していた。

スポーツの価値(精神的、社会的、身体的、心理的)については、心理的な「克己心を育てる」という項目以外は、4か国とも高い値の回答であった。台湾の学生は、スポーツが地域連帯に役立つという点については、やや懐疑的に考えているようである。

表3. スポーツ文化観の国別比較

	Nations				F 値	有意確率
	日本	台湾	マレーシア	韓国		
スポーツ参加の機会がある	3.09	3.53	3.63	3.08	16.032	.000
適切なスポーツ施設がある	3.16	3.45	3.50	2.99	9.332	.000
スポーツ施設はすぐ利用できる	2.98	3.50	3.33	2.96	16.403	.000
自国選手のメダル獲得を誇りに思う	3.76	3.99	4.08	4.11	4.937	.002
自国選手が活躍を誇りに思う	3.85	4.21	4.31	4.21	14.427	.000
代表選手がベストを尽くすと嬉しい	3.80	4.24	4.25	4.19	17.299	.000
地元のスポーツイベントに詳しい	2.52	2.60	2.99	2.60	10.170	.000
スポーツ記事はいつも読む	2.41	2.76	2.81	2.77	8.595	.000
スポーツニュースをいつも見る	3.01	2.94	2.73	2.89	7.574	.000
スポーツ番組をいつも見る	2.75	2.99	2.88	2.93	2.709	.040
スポーツは克己心をつくる	3.54	3.78	3.88	3.51	8.529	.000
スポーツは健康維持に役立つ	4.17	4.19	4.48	4.01	8.409	.000
スポーツはメンタルヘル스에役立つ	4.06	4.11	4.44	4.25	10.159	.000
スポーツは地域の連帯に役立つ	3.88	3.51	4.26	4.08	29.923	.000

表4は、専攻別にスポーツ文化観を比較したものである。表4Aは、体育・スポーツ学専攻学生を除いた表である。「その他の専攻」には、経営学、経済学、心理学、工学等が入っており、スポーツ文化観の全項目で健康関連専攻の学生よりも高いスコアであった。「その他の専攻」には、マレーシアの学生が大半を占めている。マラヤ大学では、スポーツセンターを中心に校内スポーツ競技 (Intramural Sports) 活動が盛んなことから、このような結果をもたらしたと考えられる。

表4. スポーツ文化観の専攻分野別比較

	専攻分野				F 値	有意確率
	医学	スポーツ	看護	その他		
スポーツ参加の機会がある	3.57	4.18	3.08	3.49	53.296	.000
適切なスポーツ施設がある	3.54	3.72	3.56	3.12	16.673	.000
スポーツ施設はすぐ利用できる	3.50	3.77	2.97	3.30	32.039	.000
自国選手のメダル獲得を誇りに思う	3.30	4.21	3.90	4.07	6.163	.000
自国選手が活躍を誇りに思う	4.00	4.32	4.03	4.33	7.777	.000
代表選手がベストを尽くすと嬉しい	3.98	4.31	4.01	4.28	8.801	.000
地元のスポーツイベントに詳しい	2.82	3.29	2.41	2.98	41.815	.000
スポーツ記事はいつも読む	2.95	3.43	2.31	2.90	50.988	.000
スポーツニュースをいつも見る	3.14	3.63	2.82	2.87	27.104	.000
スポーツ番組をいつも見る	3.13	3.69	2.64	2.99	43.419	.000
スポーツは克己心をつくる	3.72	4.05	3.54	3.96	17.654	.000
スポーツは健康維持に役立つ	4.12	4.34	4.21	4.45	5.173	.000
スポーツはメンタルヘル스에役立つ	4.10	4.26	4.12	4.41	4.846	.000
スポーツは地域の連帯に役立つ	3.74	4.00	3.81	4.19	8.289	.000

また、参考としてスポーツ専攻学生の平均点も表4に載せてあるが、スポーツの価値については「その他」の分野専攻の学生の方が、高いスポーツ文化観を示している。表4Aに示されているように、スポーツ参加の機会にあまり恵まれていない看護専攻学生のスポーツ文化観が医学専攻学生よりも低いことが明らかになっている。スポーツをする機会が少ないことに加えて、

表4A. スポーツ文化観の専攻分野別比較(体育・スポーツ学除外)

	専攻分野			F 値	有意確率
	医学	看護学	その他		
スポーツ参加の機会がある	3.57	3.08	3.49	24.154	.000
適切なスポーツ施設がある	3.54	3.56	3.12	22.553	.000
スポーツ施設はすぐ利用できる	3.50	2.97	3.30	25.606	.000
自国選手のメダル獲得を誇りに思う	3.30	3.90	4.07	2.374	NS
自国選手が活躍を誇りに思う	4.00	4.03	4.33	8.121	.000
代表選手がベストを尽くすと嬉しい	3.98	4.01	4.28	7.032	.001
地元のスポーツイベントに詳しい	2.82	2.41	2.98	30.367	.000
スポーツ記事はいつも読む	2.95	2.31	2.90	39.373	.000
スポーツニュースをいつも見る	3.14	2.82	2.87	7.333	.001
スポーツ番組をいつも見る	3.13	2.64	2.99	19.834	.000
スポーツは克己心をつくる	3.72	3.54	3.96	15.896	.000
スポーツは健康維持に役立つ	4.12	4.21	4.45	9.501	.000
スポーツはメンタルヘル스에役立つ	4.10	4.12	4.41	9.449	.000
スポーツは地域の連帯に役立つ	3.74	3.81	4.19	13.190	.000

スポーツ情報についても興味・関心が低いことが窺われる。

表5と表6は、学生の運動習慣に対する意識の調査結果である。この質問は、運動習慣 (Exercise

表5. 運動習慣に関する学生の国別比較

	Nations				F 値	有意確率
	日本	台湾	マレーシア	韓国		
他の人が運動すべきであると言うので運動する	2.35	2.81	2.50	2.45	11.689	.000
運動しないと罪悪感を感じる	2.60	2.87	3.31	2.81	19.778	.000
運動の利点を大事にしている	3.64	3.84	4.15	3.68	16.008	.000
楽しいから運動する	3.71	3.68	3.74	3.35	3.491	.015
なぜ運動しなければならないかわからない	2.33	2.15	2.04	2.36	4.843	.002
友人、家族、仲間が運動しようというので運動に参加する	2.30	2.76	2.63	2.43	12.104	.000
運動の機会を逃した時、恥ずかしいと感じる	2.66	2.89	2.65	2.73	1.187	NS
定期的に運動することが重要だ	3.66	3.51	3.91	3.29	9.775	.000
運動の機会はうれしい	3.62	3.79	3.81	3.28	7.555	.000
しばらくの間運動していないと落ちこぼれるように感じる	2.79	2.86	3.10	2.85	3.650	.012
私がないと他の人が楽しくないので運動する	2.21	3.38	2.19	2.39	86.913	.000
定期的に運動する努力をすることが重要である	3.67	3.89	3.97	3.44	9.498	.000
友人、家族から強制的に運動させられるように感じる	2.35	2.57	2.26	2.69	5.819	.001
定期的に運動しないと落ち着かない	2.72	2.91	3.09	2.72	6.451	.000
運動に参加することに喜びと満足感がある	3.46	3.78	3.82	3.40	9.886	.000
運動は時間の無駄だと思う	2.00	1.87	1.66	1.99	5.431	.001

regulation : BREQ-2) は、Mullan, Markland & Ingledew (1997)が開発した動機づけ理論を基盤とした運動習慣尺度である。内発的な動機づけが高い人ほどスポーツ参加への意思と実際の行動が伴うと考えられており、専攻に関係なく内発的な動機づけが高く、外発的な動機づけは低いと言える (表6参照)。体育・スポーツ学

表6. 運動習慣に関する学生の専攻別比較

	専攻分野				F値	有意確率
	医学	スポーツ	看護	その他		
他の人が運動すべきであると言うので運動する	2.75	2.55	2.40	2.47	5.473	.000
運動しないと罪悪感を感じる	3.04	3.33	2.55	3.24	27.625	.000
運動の利点を大事にしている	3.88	4.07	3.64	4.11	14.719	.000
楽しいから運動する	3.80	3.99	3.59	3.72	8.154	.000
なぜ運動しなければならないかわからない	2.33	2.24	2.21	2.10	1.344	NS
友人、家族、仲間が運動しようというので運動に参加する	2.73	2.60	2.34	2.58	5.712	.000
運動の機会を逃した時、恥ずかしいと感じる	2.99	3.09	2.58	2.72	5.932	.000
定期的に運動することが重要だ	3.63	3.91	3.55	3.87	8.304	.000
運動の機会はうれしい	3.78	4.14	3.57	3.80	17.295	.000
しばらくの間運動していないと落ちこぼれのように感じる	3.12	3.31	2.67	3.03	16.635	.000
私がしない他の人が楽しんでいるので運動する	3.08	3.43	2.34	3.26	59.565	.000
定期的に運動する努力をすることが重要である	3.77	3.99	3.71	3.94	5.300	.000
友人、家族から強制的に運動させられるように感じる	2.62	2.46	2.32	2.36	3.767	.002
定期的に運動しないと落ち着かない	3.04	3.28	2.63	3.10	20.192	.000
運動に参加することに喜びと満足感がある	3.66	3.98	3.51	3.85	12.804	.000
運動は時間の無駄だと思う	2.06	1.69	1.86	1.71	5.689	.000

専攻に比べると看護学専攻学生は、内発的な動機づけが最も低いが、ネガティブな外発的動機付けではスポーツ参加行動を起こさないとと思われる。

5. まとめ

本研究は、東アジア3か国、東南アジア1国の健康関連専攻学生を中心としたスポーツカルチャー(スポーツ文化観)の浸透度を比較するために、英文と各国の自国語による自己回答方式による質問紙調査を実施した。1か国1大学が調査対象であり、専攻別および学年別のサンプル抽出法が予定通りにはいかなかったが、各大学の共同研究者の協力でも1500を超えるデータを収集できた。

体育・スポーツ学専攻のサンプル400を分析から外し、主に医学専攻と看護学専攻を中心とし、その他の専攻を含めて分析を進めた結果、以下の点が主な結果として出された。

- ① 専攻・国に関係なく、大学生にスポーツカルチャーは浸透している。特に、スポーツの価値に関する文化観は浸透している。
- ② 看護専攻の学生のスポーツカルチャーと運動習慣は、他の専攻と比較して有意に低いが、ネガティブではない。したがって、看護専攻に興味を高めるようなスポーツの情報とメデ

ィア経路を開発する必要がある。特に、女性中心の職業であることから「3C: Cute (可愛い)、Charming (きれい)、Cool (かっこいい)」の要素を含んだマーケティング戦略が必要となる。

- ③ スポーツカルチャーの尺度の再吟味が必要である。スポーツアイデンティティの因子を再吟味するとともに、多変量解析(探索的因子分析: Confirmatory factor analyses)を用いて3つの要因の関連を確認する必要がある。

本研究の目的であったスポーツカルチャーの浸透度を客観的なエビデンスを用いて論じることが現段階ではできない。都市基盤の再開発が急加速しているシンガポールにおいて、スポーツの立ち位置が生涯スポーツ主体から競技スポーツを前面に出す政策が、アテネ五輪以後進められてきた。2012年のユースオリンピック開催がその当時高校生年代であった世代にどのような影響をもたらしたのだろうか? スポーツ実施率とスポーツ参加の質的な情報も今後入手しながら、東アジアと東南アジアに分けてのスポーツカルチャーの浸透度をさらに実証研究を続けていきたいものである。

主な参考文献

- 井上俊・亀山佳明編(1999) スポーツ文化を学ぶ人のために. 世界思想社.
- 井上俊・菊 幸一(2012) よくわかるスポーツ文化論. ミネルヴァ書房.
- 菊 幸一(1999) スポーツ文化研究の方法と成果. 井上俊・亀山佳明編(1999) スポーツ文化を学ぶ人のために. 世界思想社. pp. 2-5.
- 川西正志・野川春夫編(2012) 生涯スポーツ実践論. 市村出版.
- Pate, R. R., Trost, S.G., Levin, S., Dowda, M. (2000). Sports participation and health-related behaviors among US youth. Archives of Pediatrics and Adolescent Medicine, 154, 904-911.
- 佐伯年詩雄(2006) 現代スポーツを読む: スポーツ考現学の試み. 世界思想社.
- 佐伯年詩雄(2013) スポーツ文化論の思想と実践〜楽しい体育からスポーツ宣言日本まで〜. 日本スポーツ社会学会編, 21世紀のスポーツ社会学. 創文企画. Pp. 254-261.
- 笹川スポーツ財団(2012) スポーツライフ・データ2012: スポーツライフに関する調査報告書.

- 清水 諭 (1999) スポーツ文化研究の方法と成果.
井上俊・亀山佳明編 (1999) スポーツ文化を学ぶ
人のために. 世界思想社. pp. 321-340.
- 杉原 隆編 (2011) 生涯スポーツの心理学. 福村
出版.
- 高橋豪仁 (2011) スポーツ応援文化の社会学. 世
界思想社.
- Wang, C. K.J., Lim, B. S. C., Wee, S. W., Soon, F.
M. (2011). Development of an inventory for
measuring sporting culture International
Journal of Asian Society for Physical Education,
Sport, and Dance, 9 (2), 44-53.
- Wang, C.K.J. (2006). Socialisation through sport:
the relationship between sport participation and
community bonding: A Research Final Report.
Ministry of Community Development, Youth &
Sport, Singapore.
- Zarrett, N., Fay, K., Li, Y., Carrano, J., Phelps, E.,
Lerner, R.M. (2009). More than child's play:
Variable- and pattern-centered approaches for
examining effects of sports participation on
youth development. Developmental Psychology,
45, 368-382.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです